

こんな女と暮らしてみたい

高橋三千綱



こんな女と暮らしてみたい

著者 高橋 三千綱
発行者 小澤 和一

発行所 株式会社 青春出版社

162 東京都新宿区若松町73番地

振替番号東京九一九八六〇二番
TEL (203) 五一二一〇九番

★この本をお読みになったご意見・感想を編集部までお寄せ頂ければ幸いです。

検印を廃す

著者紹介

作家。昭和23年大阪生まれ。サンフランシスコ州立大、早稲田大学中退。49年「退屈しのぎ」で群像新人賞。53年「九月の空」で芥川賞を受賞し、文壇に新風を送る。最新作「天使を誘惑」が百恵・友和コンビで映画化され話題となる。芝居の演出（本年5月、初の書き下し自主公演「彼女の試み」を新宿で行う）、翻訳、草野球、乗馬、酒……と次々に情熱を燃やす硬派型クロスオーバー人間。

本書は、著者がこれまで出会ったさまざまな人間を通して、より確かな男と女の関係を探った初のエッセイである。他に「葡萄酒」「怒れど犬」「彼の初恋」等多数の著作がある。

印刷・堀内印刷 製本・大口製本

0000-209600-3822

© Michitsuna Takahashi 1980

高橋三千綱

こんな女と暮らしてみたい



青春出版社

はじめに——女は恋のために死ねるが男はなぜ死ねないか

●心から愛し合える一つの能力とは何か

或る心中事件について、話してみよう。今書いている小説で、ストーリーのきっかけとしてこの心中事件が登場する。小説ではもちろんフィクションにしているが、実は、身近な実話があった。

関西の旧家の出で、東京に転勤になった男が、飲み屋で、何度目かの恋に破れた女と巡り会った。彼には婚約者が関西にいたが、東京にいる佗し^わさで、まあちょっかいを出したということになる。彼女は私もよく知っている人なのだが、実は、死ぬ二、三日前、偶然その二人に新宿の飲み屋で出会った。彼は堅いというか、真面目で、不器用な生き方しかできないような男だった。

彼女は真剣に愛していた。

「あなたは、私と婚約者のどちらを選ぶの？」

と迫ったという。彼は婚約解消の相談をするために関西の実家に帰り、その間彼女は、ウイスキーを飲みながら、彼の部屋で一人、息をひそめて待っていた。

彼はとんぼ帰りて東京に戻ってきたのだが、ドアを開けて部屋に入ってくる彼の顔を見た瞬間、彼女は、あ、駄目だと悟ったのだと思う。ああ、やっぱり駄目だったか、と。

で、どういう会話が交わされたのか分らない。とにかく、彼はウイスキーを一口しか飲んでいない。

おそらく、彼女は、

「そう、残念だったわね。でも、もういいのよ。まあ、飲んでちょうだい」

とでもいって、グラスを渡したのだろう。彼は一口飲んだだけで、吐血して死んでしまった。酒には青酸カリが入っていた。相当苦しそうな顔をしていたそうだ。で、彼女も彼の死を見届けると、一気に青酸カリ入りのウイスキーをおおって、彼のあとを追った。警察の調べによると、そうなる。

この無理心中事件では、彼は全くの被害者だし、こういう女に巡り会ったということは、なまじ彼に人情味があっただけに、不幸としかいえない。だが、この事件は男と女の間に

ある、埋められない深淵というものを感じさせる。

それは一口でいえば、恋に対する命の賭け方の違いであろう。勿論人によって違うかもしれないが、大多数の女性は、恋人が側にいれば安心すると思う。恋人がいつも笑顔を向けてくれれば一番いいわけだが、そうでないにしても、自分の側にいる限り安心だと考えている。女性はずねに、世界を男と女に限定して考える。そういう意味では、女は、男が人生の対象となり得る。

勿論、男も仕事と同様に、恋にも賭けるべきだと思うし、そういう情熱はみなあるはずだと思うが、ただ、世の中には無器用な男が多い。当然それは女にもいえる。

で、仕事も恋愛も考える男の恋愛観と、男を人生の対象と信じている女の恋愛観がまともにぶつかると、これはもう、どう見ても男が負けてしまう。だから、仕事が恋愛関係に引きずられて、泥沼に入ってしまうようなときには、男は必ず、その恋愛関係を断ち切ってしまう。

女は最終的に、恋のために死ねる。だから自殺はおろか、無理心中も辞さない。男から見れば不思議なのだが、何度も恋愛を経験した女でも、新しい恋人に巡り会って、もうにっちもさっちもいかないとなると、わりあい単純に死んじゃう人がある。そうすることができると。

先程書いた無理心中事件の二人も、知り合ってから死ぬまで、僅か二、三週間の出来事であ

る。勿論それだけ強く惹かれ、愛してしまったということにもなるが、彼女があらかじめ青酸カリを用意していたということは、彼女にいちかばちかの恋をしようという決意があったということだと思う。

男の場合はふつう、二人の置かれている状況をわりあい理性的に見るが、女の場合は、究極的には、すべてを巻き込んで死んでしまおうとする、死なないまでもそういう状況に近づこうとする性向がある。だから男は、そうした危険な深淵を敏感に察知して、女と別れるんだと思う。恋に対して臆病でもあるし、全面的にのめり込めない理性が働くともいえる。

つまり、女は最終的に恋のために死ねるけれども、男は燃焼はできても、死ねない。それはどちらが善い、悪いということではなく、男と女の本質的な違いとしてあると思う。

*

*

私は女が、巡り合う男をつねに結婚相手に考えるということは、それなりに正しいと思う。ただ、女には独占欲というか、相手の人生を自分のものとしてしまうところがあるし、男に比べて強い。

私は数年間アメリカに滞在していたのだが、アメリカ人は直截的ちよくまつかだと思う。夫婦が危機に陥

いると、必ず妻はこう切りこむ。

「あなたにいたい、仕事と私とどちらが大切なの」

夫が、

「勿論君も大切だけど、僕が仕事を捨てたら、この家庭は維持できないじゃないか」

そう答えると、

「そんなこと、わかっているわよ」

と妻がいう。

で、わかつたうえで、

「でも、愛しているんだから、あなたは当然私のほうを向くべきだわ」

そういって、離婚になる場合が多い。そしてそれは、アメリカでは当然、慰謝料を払わなければならない理由になる。金持ちは慰謝料を払えるからまだいいが、貧乏人の場合は払えない。そうになると、夫婦関係は險惡なまま、男は仕事の重圧にあえぎ、妻は夫を永遠に罵り続けるということになる。

こうした、仕事も含めた男の人生をまるがかえで所有したいという女の欲求は、男にとって耐えがたいものだが、それはやはり、男を人生の対象と考える女の、愛に対する執着の強さ

によるのだと思う。そして、それは、ごく一般的に言えば、ほとんど年齢に関係ないのではないだろうか。

先日、七十八歳で死んだ母親を看護していた知り合いの女性が、

「女性の性器って、やっぱり灰になるまで生きているのね」

と、私にいった。

その瀕死の母親は、骨と皮ばかりに瘦せ細り、腕は点滴の痕ばかりという見るも無惨な姿なのだが、性器だけはしらがもなく、とてもきれいで、ふっくらと肉がついて、まるで別の生き物のように息づいていたという。初めて母親の性器を見た、四十八歳になる彼女は思わず戦慄したそうである。自分にも実は、そういう部分があるんじゃないか、と思ったという。

勿論、性器ひとつでいえるかどうかかわからないが、愛そのもの、セックスもひくくめた愛そのものに対する執着の強さというのは、意識する、しないにかかわらず、女には共通にあるのではないかと思う。

*

*

男も若いうちは、女と巡り合って恋に落ちれば、燃える。しかし一度二度と恋愛を経験すれ

れば女の愛が自分を独占しようとするものであることが解ってくる。愛のさまざまな形状——甘えとか、献身とか、嫉妬とか、そういうものが所有欲の現われにほかならないということを知る。同時に、男にも独占欲はある。それはナマな形より、ロマンチックな形で出てくることが多い。だが、男の場合、ロマンチックな分だけ、信用できない。女の正当な、身体をふつてくる愛には正直になれないところがある。防衛本能を身につけた女なら、そういう男の心情に注意をする。

よく「女の最後の恋は男の初恋に似ている」といわれるように、女は飽くことなく、愛を求める。それはセックスの違いからきてるように思う。女性器は一般的には受け身のようにいわれているが、実は逆だと思う。男の場合は勃起しないとセックスできないが、女の場合、極端にいうと、脚を開けばいつでもできる。そうした意味では女のほうが能動的だし、愛に対するスタミナがある。その点では、男は敬服するほかないわけである。しかし、そのことだけで終わってしまえば、男と女の溝は、決して埋まらない。

私は作家だが、作家に限らず、どんな仕事をしている男でも、その仕事に飽くことなく執着し、その奥の奥まで探険したいという欲求がある。それは女の愛に対する執着や所有欲と同じだ。それを、仕事か恋愛かと論争するのは、全く無意味なことだ。男は必ず負ける。極端にい

えば「うるさい！」といって怒鳴るか、もう諦めておだてるしかない。

そうではなくて、こうした男の欲求を、稼ぐ以上に仕事に熱中してしまう男の気持ち、ぜひ女性を理解してほしい。そこで初めて、女に、所有欲ではない思いやりや、男を大きくつみこむ包容力が生まれてくるわけで、これこそが、男が心の内奥で求めている愛だと思う。

しかし、こう言葉でいうのは簡単だが、実際にはとても難しいことだ。

男を人生の対象とし、恋のためには死ねる女と、仕事も恋愛もと考え、燃焼することも恋に死ねない男が、それぞれにエゴイズムを持ちながら愛し合うわけだから、そこには当然、喧嘩もあれば、いさかいもある。

そうした毎日を、優しさや思いやりでかろうじて繋ぎ止めながら、三十年、四十年と歳月を重ねて共に老人になったとき、やっと一組の男女は心から愛し合えるようになるのかもしれない。

それは絶望的に時間のかかる作業であろう。だが男と女の溝はそのときになって初めて埋まるのではないか、と考えている。

目

次

はじめに——女は恋のために死ねるが男はなぜ死ねないか 3

●心から愛し合える一つの能力とは何か

I こんな女に出会ってみたい……………15

- 1 やさしい男に気をつける 16
- 2 男の事情を見ぬく女は 27
- 3 誠実に生きている男の眼 32
- 4 だめな男に惚れてしまう女心 38
- 5 見てくれだけが男ではない 43
- 6 その男のどこに眼をやるか 50
- 7 頼もしい男の遠い方 56
- 8 男の夢がわからない女 62
- 9 友情とは精神的同性愛だ 67
- 10 誰にも話せない男だけの世界 73

Ⅱ こんな女を愛してみたい……………109

11	初体験をさらしてしまった男	79
12	男が求める女への感受性	84
13	変人ぶった男の内奥	90
14	打算のない男の別れ方	96
15	愛とは身勝手で酷薄なものだ	101
16	男が最後に想い出す女	110
17	傷心のひとり旅に出るいい女	116
18	都合のいい夢ばかり見るな	126
19	他人 ^{ひと} にないものを秘めた女は美しい	131
20	自分のどこに気づかないでいるか	144
21	男の愛を呑み込める女	156

III こんな女と暮らしてみたい……………173

22 心意気で美人に見える女 161

23 自分だけのやさしさがあるだろうか 174

24 夜汽車に託す男のロマン 183

25 その愛に賭ける女 194

26 こんないい男がなぜモテないか 199

27 本物の信頼とはどんなものか 205

28 惚れた女に感じる男心 211

29 いい女は人生を戦いつづける 217

30 男の中味がわかる女へ 230

本文カット・原田 治

I こんな女に出会ってみたい